

モンゴル民族の社会構造における姓氏と親族名称

著者	小林 高四郎
雑誌名	社会労働研究
巻	3
ページ	107-121
発行年	1955-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017385

モンゴル民族の社会構造における

姓氏と親族名称

小林 高 四 郎

はしがき

一 姓氏について

二 親族名称について

むすび

はしがき

中世モンゴル民族の社会構造はいったい如何なるものであったか、ということは、モンゴル学の他の領域に比して比較的未開拓である。ソ連のすぐれたモンゴル学者ベ・ヤ・ウラヂーミルツォフ教授が主としてモンゴル史料を縦横に駆使して蒙古封建制度史を著わしたが、のちの学者も多くはこれを出発点として漸く開明の道を拓きつゝある現状である。しかしモンゴル社会の基本的構造たる親族の諸点については、なお明確を欠く。わたくしは本稿

において、わずかに「氏族」と「親族名称」の二つに関して少しく調査したところを叙べ、さらに他日、自余の社会構造について論及しようと思う。

一 姓氏について

わたくしはさきに十三・四世におけるモンゴル人の文化変容について考察した際、姓氏を有たぬモンゴル人が漢文化の影響により、字を附するに至った次第を指摘するとともに、遊牧民族間における姓氏の問題は、別に詳論することを約束したのである。特別に宗法を重んずる漢人農耕社会と、水草を逐う遊牧社会における家族の問題の正しい理解のために、次にこれについて叙べてみよう。

すでに一言したように、モンゴル、チュルク、アラビヤ等の諸

民族が family name ないし surname を有しないことは周知の事実であるが、中国史家の特別の注意を惹き、史記^{卷一〇}匈奴伝の冒頭に、

その俗、名有りて諱まず。而して姓字なし。

と記されているのであるが、この卓れた史家は、漢代モンゴル高原に活躍した匈奴の風習について、いちおう正しい認識を有ったものの如くであるが、同じ伝の他の個処で、

諸大臣、皆官を世々にす。呼衍氏、蘭氏。その後、須卜氏有り。此の三姓は其の貴種なり。

といふ、姓氏の存在を肯定しているのである。しかしそれが family name または surname でないことは、あえて論証を俟つまでもなく明かであるが、それが族名なのか、あるいは Sub-clan の名であるかは断言しえない。いずれにせよ厳密な意義における姓氏ではない。

唐代に至って漢人は漸く部族名と解するに至ったことは、旧唐書^{卷一〇四}哥舒翰伝に、

哥舒翰は突騎施 [Türkes] の首領にして、哥舒部落の裔なり。蕃人多く部落を以て姓を称す。因って以て氏となす。

と見え、部落（恐らく部族・氏族と同意義に解したのだろう）の名をとって、その所属成員が姓を称したとみた。

中世モンゴル社会ではどうか。一二三七年、太宗の朝廷に使した宋人、彭大雅の黒韃事略なる書に、

その称谓、小名ありて姓字なし。

とあることは嘗て引いた。然るに元史の各列伝を繙くと、某々は某々氏とし、悉くが部・族または氏族の名である。たゞ唯一の例外は、卷一一八特薛禪伝である。曰く、

特薛禪 [Dei-secen] 姓は孛思忽児 [Bosqur ?]、弘吉剌 [Onggirad] 氏なり。世々朔漠に居る。本名は特因 [Dein]。太祖の兵を起すに従いて功有り。名を薛禪 [Secen] と賜う。故に兼ね称して特薛禪と曰うなり。

とあり、姓は Bosqur、氏は Onggirad とある、用語が頗る曖昧である上に、Bosqur なる名辞は中国史料はもとより、イスラーム史料にも絶えて見えない。

十三世紀モンゴル人の生活を極めてヴィヴィッドに描写している古典「元朝秘史」^{卷一}には各民族の起源を説明するいくたの説話を載せているが、そのいずれもが「……obog-tan bolu-ba」(「…姓あるものとなりたり」とあり、モンゴル語 obog (「…を有する者」を意味する) の訳語として「姓」字をあてているのである。)

然らば obog とはどういう意味か。ソ連のモンゴル学者故ベ・ヤ・ウラデーミルツォフ教授に従えば、obog ~ obox とは「特殊の血族団体」を意味し、その本義は語源的にはチュルク語の obmag, omag, obaq, oba (「同一の」の意) に近いものだろう。⁽⁵⁾

なわち「氏族」の意味である。漢人は本源的には「共同の Sippe」を表わす「姓」なる訳字を、同姓不婚の規範意識としてはなお生きているが、既に「家姓」となった時代にも、最も適切な訳字と考えたのであろう。マードックに従えば、「氏族」(Clan)とは、「親族関係の第三の主要類型として」(第一のそれは居住親族集團、第二のそれは血縁親族集團を指す——小註林)、居住の準則と出自の準則——これら二つが調和しえられる限りにおいて——との両つに基く親族集團」であるが(George Peter Murdock, Social Structure, New York, 1949, p. 66) これを従来 Clan なる術語を以て呼んでいるが、マードック氏は的確を欠くとし、多くの躊躇を示しつつも姑くこの語を用うとしている。(前掲書六七頁参照)

ロバート・ローウは氏族については「慣例上、多数の英語国の学者は氏族を単系外婚集團と定義し、かつては、トーテムズムがその基準に附加されたが、しばしばアメリカ、アフリカ及びアジアにはそれを欠いているので、この特徴は本質的なものではないとして除かれたことはよいことだった。」(Social Organization, pp. 236—237) といつてゐるように、モンゴル民族の族外婚にもトーテムズムの存在を予想し、チングス・ハーン家の遠祖が「惨白の狼」(böte cina) や「美しき牝鹿」(yoai maral) と結婚したという伝承(秘史第一節)に認めようとする者があるが、われわれはウラヂーミルツォフと共に慎重に断定を控えたい。

わたくしもマードックの意見に従うのであるが、われわれはこ

の obog の語を手掛りとして、中世モンゴル社会の氏族制度を明らかにしようのであり、事実ウラヂーミルツォフ教授によりかなりの程度に成し遂げられたのである。これに更に、輓近の文化人類学の成果の光を投ずることによって、深められうるものと考ええる。今のわたくしにはあえてそれを行ふ余裕を持たぬが、この氏族は父系的であり、換言すれば、各民族員は同一の先祖(ebügen)に発したものであるが、これが更に発展分岐してくると、一連のオボクのエブゲンが同一である意識され、かゝる諸氏族の成員間の結婚は出来ない。すなわち族外婚(exogamy)である。(9) そうして同一氏族のみが氏族共同の祭祀に参加しえ、血縁外の親族といえども、これに参加し得なかつたのである。(7)

われわれの社会にあつては「家姓」によつて父系の出自(姓氏の中国にあつて、妻は婚姻後もなお生家の姓を夫姓の下に附するが、それも一代のみで、それから、記憶されるのはあくまでも父系の姓のみである)を他と區別し得るが、名のみあつて家姓のない遊牧民は、どうして氏族名を伝えられたらうか。これについてはウラヂーミルツォフも引用しているが、ラシード・アッ・ディーンが頗る美しい表現で次のように述べている。

すべて彼らには(アラン・ゴワから出てた氏族員) 明白な系譜があつた。けだしモンゴルの慣習では、彼らは自己の祖先の起源を保持しているからである。新しく生れた子には、他の民族が「同一の國民から」というように、いずれもその起源と出自とを説明して聞かせる。これがため、自己の部族やその出自を知らざ

るものは彼らの中にはないのである。モンゴル人以外には、真珠の粒のようにして自己の起源を保持するアラブ人を除いては、かゝる慣習は存在しないのである云々。(Bereizin, Rashid-ed-Din, tome II, str. 8-9)

また他の個処でも、

モンゴル人は古くから、彼ら自らの出自と氏とを保持する習慣がある。彼らの間には、他の民族のように、子供を訓育すべき宗教も信仰も無いので、新しく生れた子供たちに対して、父や母が、出自と氏とを説明してやるのである。かゝる準則をかれらは常に保持し、現今も真に彼らの間に尊重されてゐるのである。……(Ibid, str. 28)

と伝えているが、かかる事実は「元朝秘史」の有名な Alan-γoa が五人の子供に箭幹を与えて訓戒する物語についてみても首肯されよう。「旧き辞を尋ね、翁等の辞を引く」とは、古くからの伝承・氏族の出自、系譜などを子供たちに語り聞かせることであつたろう。子や孫は、これによって自己所属の氏族名を覚えたのである。事実「秘史」には、名乗り、誰何の際には常に氏族名を附するのが慣しであつたようで、ドブン・メルゲン (Dobun-Mergen, あらゆるモンゴル諸氏族の母と考えらる) が、子を伴える貧しい人に「何人ぞ汝」と問うたのに対し「我はバヤウタイ氏族のマアリクなり云々」(秘史卷一第十五節)と答えたこと、前述のアラン・ゴアが神の子として生める三人の末子ボドンチャル (Bodoncar) が産えた妊娠

の婦女に向い「何氏族の人ぞ、汝は」と問うたのに対し「ヂャルチウト・アダンカン・ウリヤンカデンなり、我は」(秘史卷一第三八節)といったことなど、その他多くの例を挙げることが出来る。

このことはマンシェウ民族のばあいと似てゐる。シロノロフ教授の説明によれば、氏族 (mokun) は数個の組 (dalan) に分れてゐるが、モクン中における人の正しい地位を識るために人は「どの組に所属しますか」と質問する由である。

さて obog は父系的氏族たることを理解したが、何故に同一氏族の成員は結婚は許されなかつたのか。それは彼等が同一の「骨」(yasun) に属し (ヤスンとは「骨」の外、「race, famille」の意) 味がある。Kowalewski, Dictionnaire mongol-russe-français, p. 2274a 血を同じくする父系の親族から出たからに外ならない。この事はウラヂーミルツォフ教授も説明したところである。しかしこの「骨」の問題はもっと突込んで研究されなければならぬ問題である。

この問題に鋭いメスを入れたのはレヴィ・ストロースである。彼はその大著「親族の基本的構造」の第三部第二十四章「骨と肉」(Os et la Chair) の題下に縦横に詳論しているが、彼は「結婚の本質的理論の「ライト・モチーヴ」としての「骨は父方から受け、肉は母方から受ける」という信仰」を認め、チベットの例として「骨の親族」と「肉の親族」間の区別は、客観的には一般的交換 (L'échange généralisé, 彼は婚姻の相互交換の二つの類型) を一般交換と限定交換 (L'échange restreint とに分ける) の方式に関連しており、恐らく中国及びシベリアにおけると同様

であつたろう」とし、⁽¹³⁾ また別の個処では、骨と肉の理論はインドからシベリヤに至るまで見出されること、そして本理論はまた、痕迹的な形で、モンゴル人及びロシア領トルコ人の間にも存在すると述べているが、⁽¹⁴⁾ その拠るところの資料を示していない。そしてこの「骨」には白と黒の二種あり、⁽¹⁵⁾ 獯獯族の間の「白骨」と「黒骨」はチュルク族の一つであるカザック人の間にも存在するといひ、カザックの貴族は「白骨」(aq syjek) という名称で呼ばれ、平民は「黒骨」(kara syjek) と呼ばれており、「白骨」は一つ、または多数の、真実かあるいは理論上の血統を構成したものと考えられること、婚姻は、たとい原則上非難されるとはいへ、この二集団の間では知られていないことはない(ロロ族のばあいは、黒白相互には結婚出来ず、この点カースト的な存在である)と叙べている。⁽¹⁶⁾

元代モンゴル人の間にも「黒骨」(Xaracu, pl. xaracud) と呼ばれるものが存在したことは、ラシード・ウッ・ディーン(第三卷一二六頁)にチンギスの格言を叙べた個処に、(一)君主、(二)ベキ(別名)、(三)平民たる兵士、(四)平民すなわち黒骨、(五)家僕の社会群を挙げていたので判る。⁽¹⁶⁾ 然し之に對する「白骨」なる名称があり、貴族の身分を示すものとして用いられた形迹はない。しかし清代のモンゴル人博明の西斎偶得^卷上蒙古族姓の条に「蒙古は最も族姓を重んず。分ちて二種の骨となす。曰く白、曰く黒。白尊くして黒卑し。白、主にして、黒、奴なり。今の白骨は二姓。博爾

濟吉特 [Borjigid] と曰ひ、帝の裔なり。烏浪漢 [Urianggan]・濟爾默 [Jirmu[d] ?] は^{ウラヤ}后及び駙馬の裔なり。」とあり、「白骨」と「黒骨」の二族姓があり、前者は尊くして、⁽¹⁷⁾ チンギスの後裔たるボルヂギン氏族、后妃・駙馬の後裔たるウリアンカン氏族、ドルメト氏族とに限り、黒骨は卑しくして、一般庶民が之に属すると申している。現在のわたくしには之をさらに裏書きする傍証をもたぬが、モンゴル知識人の記述として、いちおう従つて差支えなからう。たゞ「肉」の觀念を示す語彙ないし記述を見出しえないのは遺憾である。たゞこの「白骨」と「黒骨」の區別がどの時代まで遡り得るか、今後の宿題として残される。

註 1 チュルク共和国は一九二六年ケマル・アタ・チュルクの革命の結果、スキス民法を採用し、法律を以て公布された數十の「姓」の中から随意その一をとらしめたのである。今日なお官庁文書や旅館屈出でに父名を記させるのは、之によつて同一名(これも主としてイスラーム名であるため Ahmet, Hassan とか Abudullah の如きを區別するため)の混乱を避けた遺風である。アラビヤもまた「……の子(ibu)の某」としていることは云う迄もない。古いチュルク人については「回子は姓氏・宗譜なし」(西域聞見録卷七回疆風土記、風俗の条)とあり、モンゴル人と全く同様であつた。

2 のちに丘林氏^{ウラヤ}が加えられ四姓となつたが、今はその数は問題ではない。

3 中国における姓・氏については、最も簡明な加藤博士の「支那の社会」(岩波^{東洋}所收)八頁—十一頁を看よ。これによ

るに、姓とは中国の最古の血族団体の名称であり、氏とは姓の内部に生じた幾多の小血族団体の名称で、氏は恐らく枝と同意で、姓の分派を意味した。而して周代には男子は専ら「氏」を用い、女子のみ専ら「姓」を用いたのであるが、この風習は春秋時代まで存し戦国時代に入ると、婦人も亦氏を用い、姓が廢れた。かくて姓と氏とが混じて一とされ、「姓は劉氏」などと称せられるに至ったのである。

4 例えば Dörben, Jadaran, Bügünüd, Qatagin, Salji-ud, Borjigin, Noyakin, Borulas, Buda'ad, Adargin, Uru'ud, Man'ud, Taici'ud, Besüd, Oronar, Qongqotan, Arulad, Sünid, Qabtuqas, Geniges, Yurki, etc.

5 ベ・ヤ・ウラデーミルツォフ著蒙古社会制度史、外務省訳一〇二頁参照。

6 同上、一〇三頁参照。

7 元朝秘史、第四十三節を看よ。

8 同上、第十九節——第二十二節参照。このいわゆる感生説話については内藤湖南博士「蒙古開国の伝説」(「芸文」第四年第十二号所載)参照。

9 元朝秘史一三ウ第三八節。

10 “Jarci'ud-Adangan-Uriangajin” 明の傍訳には最初の二語に「種名」とし、最後の語に「姓」として意味が明白でない。那珂博士の成吉思汗実録(一九一頁)には「札児赤兀惕(名)阿当罕兀浪合姓(元浪罕の分族)」としてゐるが、訂さるべきであろう。女性の名の語尾に—cin, jin の suffix を附することについては、ラシードの説明に据れば、部族名の終りに男子に対しては—tai(-tei)、女子には—jin を附し

て、各々その性を示す慣習があつたとし、タタル部族の項にタタルの名称を掲げている(ペレデン訳ラシード・ウツ・ディーン、第一卷五一頁—五二頁)。然し「秘史」の用例は必ずしもこの慣習を厳守してはいない。さて原文はヘーニシュ教授のドイツ語訳本には「妾はチャルチウト・アダンハンのウリヤアンハ氏族(Sippe)のものなり」とあり(E. Haenisch, Die Geheime Geschichte der Mongolen, Leipzig. 1941, S. 6). ペリオ教授フランス語訳には“Je suis une Adangan-Uriangajin, des Jarci'ut.”とあるが、アングース氏の訂正には「恐らく妾はチャルチウト・アダンカンのウリヤンカジン」と訳すべきならん」としてゐる(P. Pelliot, Histoire Secrète des Mongols, Paris, 1949, p. 126)。アフト・テミル氏チュルク語訳には同様であり(A. Temir, Mongolların Gizli Tarihi, Ankara, 1948, p. 12) 実録はやや妥当を欠く。

11 Claude Lévi-Strauss, Les Structures élémentaires de la Parenté, Paris, 1949, p. 470 所引 Shirokogoroff, Social Organization of the Manchus, p. 44.

12 ベ・ヤ・ウラデーミルツォフ教授著前掲書一〇三頁。

13 Claude Lévi-Strauss, Op. cit., p. 486.

14 Ibid, pp. 462—464. 傍点筆者。

15 Ibid, p. 490

16 ベ・ヤ・ウラデーミルツォフ教授著既出書二七四頁参照。

17 モンゴル人が白を尙んだことは、明初の陶宗儀の輟耕録卷一、白道子の条に「……国俗、白きを尙ぶ。白きを以て吉と為すの故なり」とあり、あるいは元、郝經撰続後漢書卷

七十九上、列伝第七十六上北狄の条に「色、白きを上ぶ。黒きを以て凶服となす。始立及び拜会、覲見・大慶・会祠、天神を祭るも皆、白服白馬、之を白道と謂う」とあるほか、その他の証左がある。

二 親族名称について

社会人類学において、親族組織の研究がきわめて重要なものであるが、一九二〇年末から一九三〇年始めにかけては R. Lowie, P. Kirchhoff が親族名称の新しい分類を発表し、A. R. Radcliffe-Browne がオーストラリア原住民の親族組織の研究を行き、今次大戦後、すなわち一九四〇年末から一九五〇年の始めに亘つては R. Lowie, G. Murdock, P. Lévi-Strauss, Radcliffe-Browne 等の諸研究が試みられた。⁽¹⁾ わたくしは今、ロバート・ローウキの「社会組織論」(Social Organization, London, 1950) マードックの「社会構造論」(Social Structure, New York, 1949) さらにポール・レヴィ・ストロース「親族の基本的構造」(Les Structures élémentaires de la Parenté, Paris, 1949) 等を精読して、北方アジア遊牧民族の親族組織を詳述する余裕がなく。しかし一民族の社会構造ないし家族構成の研究において、当該遊牧民族の親族称呼を示す語彙を調査することは、社会構造論の基礎資料を提供するという意味で重要である。したがって茲ではた

んなる語彙の列举と若干の解説とに止めざるを得ない。

まず常識的に考えられることは、水草を逐うて遊牧する民族には、漢人社会に見るが如き血縁的紐帯が薄弱であろうこと、したがって親縁関係を示す言葉——親族称呼に乏しいのではないか、ということである。果してさようだろうか。

この問題に入るに先ち、明かにしておかなければならないのは、「親族」の社会学的意義である。これについては文化全体との関係という新しい観点から論じたマードックの定義に従っておこう。マードックは「親族紐帯に基礎をおく社会集団を親族集団と呼び、かゝる親族集団の二大型式として「居住親族集団 (residential kin group) と「血縁親族集団」(Consanguineal kin group) とに分ち、その各々の基本的な特徴として、「居住型は常に住居の共通を特徴とするに反し、後者はたんに血縁親族のみを包含する。しかし居住型は常に若干の血縁親族を排除し、若干の婚姻による親族(姻戚)を包含する。居住型は夫と妻とを包含するが、兄弟や姉妹を含まない。血縁型は恒に兄弟姉妹を含み、殆んど夫・妻の両者を含むことがない。……居住親族型は第一に居住(residence) という一般の準則により規定されるが、血縁型は出自を基本的特徴とする」(G. Murdock, Social Structure, pp. 42—43)

従って親族称呼の研究には、必然的に「婚姻」についても論及しなければならないが、いまはしばらく必要な限りにおいてのみ、

これに触れよう。

いったい家族とはマードックによれば「共通の住居をもち、経済的協力と再生産とをなす社会集団であり、それは、少くとも社会的に承認された性関係を維持する両性の成人と、成人としても性的に（性に関りなく）同棲する一人または以上の、自身の子あるいは養子を含む」（マードック著前掲書一頁）と定義されるが、かゝる意味の「家族」を表わす言葉は何であろうか。

「家族」を表わす語として、東方モンゴル語、カルマック語などには数語を数えるが、具体的な「家」と同じ言葉「ger」によっても意識された。「家庭をつくる」こと、社会学者のいう a nuclear family を作ることを、モンゴル語では ger-le-ku (ger は「家」、suffix-le を) というが、チュルク語でもこれと全く同じ観念で、ev-le-mek (ev は「家」の意) という。そうして「家族

の成員」は東モンゴル語でもカルマック語でも sadun (コワレウ蒙・露・仏語辞典一三〇七頁) sadu (J. Ramstedt, Kalmückisches Wörterbuch, S. 307a) とさす、あるさ yasun とさす bole とさす、uruy とさす。しかしこれらの悉くの語には同時に「親族、血族、同族」等の意味を有っているのである。由来古いモンゴルには、あらゆる氏族を uruy と jad との二つに分けて考えた。前者は「同一氏族員、その子孫」従って上述の如く同一血族と考へ、後者は「他人、他国人」(jad) と意識したのである。妻方の親族 (törgüd) は血縁関係になく、異った氏族員であるから、jad

であることは勿論であるが、婚姻による親族として quda と呼ばれた（後に詳述する）。いまさきに屢々引いた十三世紀の古典「元朝秘史」では、いったいどれくらいの称谓を伝えていくかをみよう。

特殊の説明を要する語以外は、原語を併記することを避ける。

父、母、夫、妻、子、娘（長女）（次女）⁽³⁾ 兄、弟、姉、妹、婿、嫁、伯父、叔父、嫂、舅、外甥、房親、祖宗、高祖、祖宗などが挙げられる。

次にやや詳しくこれらを説明しよう。まずモンゴル人は縦の血縁意識を何代ぐらい以前まで有し、子孫は何代後まで意識されたか、換言すればそれらを表わす語彙を有っていただろうか。遊牧民族はいわゆる「壮者は肥美を食ひ、老者はその余を食う。壮健を貴び、老弱を賤む」（史記匈奴列傳）といわれ、祖先崇拜など考えられないものの如くであるが、これを伝えた同じ史家は毎年五月には「斂城に会し、其の先・天地・鬼神を祭る云々」（同上）ともいひ、祖先の霊を祭るの風習があることを教えているのである。これについて十七世紀のアプール・ガーズは一二〇三年、イルカーン朝の史家ラシード・ウッ・ディーンの著 Jamī-ut-Tevārīkh 「集史」に拠り、モンゴル人は父より七代さきの先祖を数えず——ということはある以上、祖先を表わす名称をもたぬことを暗示するのだが——として夫々の名称を挙げてゐる。（初出のラテ

アプール・ガーズ所伝、デメーゾンの転写、次は書写モンゴル語の転写）。

1. etchigüé, ecige 父

2. ebaukène, ebügen, 祖父
3. elendjik, elincüg, 曾祖父
4. boudatou, Rashid-ud-Din, boudatur 高祖
5. boudakour, " bouda-ukur.
6. mourti, " yurki.
7. doutagoun,

八代以前の祖を Rashid-ud-Din (Berezin, II, str. 69) には eledjigin-ebuge とする。

(Aboul Ghazi Behadour Khan, Histoire des Mongols et des Tatares, traduit par Le Baron Desmaisons, St. Pétersbourg, 1874, Tome II, p. 74.) 秘史では「高祖」(borgai) のみ見え、ひろく「祖宗」(uridus-sss は pl.-suffix. XI—22a.) というが、あるいはきわめてモンゴル民族独自の表現ではあるが、「老人」(ebügen) の複数 (ebüges, IV—12a, VI—19a etc) あるいはたんに単数形 (ebüge 11—23b) を以て「祖先」の意味を表わしているのである。同じく明初の編纂である「華夷訳語」あるいはこれと同系統の蒙漢対訳書として明末の「廬童塞略」など全く同断である。

(インド・ヨーロッパ語では祖先を意味する語が、「父」の複数形である pateres. によって表わされるのと対比せよ) つぎに下限についてはどうか。「孫」(中期モンゴル語 hachi, 現代書写語 aci) 以下については特別の語は古典には管見の範囲では伝えられてないが「五代の裔」を意味する jigu という語があるから (Kowa-

lewskii, Dictionnaire, p. 2354b) 精査したら、あるいはなお存在するかも知れない。「秘史」は「子々孫々」を "ury-un ury-a" (たとえば II—51a, III—21b.) 「族の族に至るまで」とか、あるいはたんに「子孫」uryu とするのみである。(IV—17b) 次にならわかれは、中国における親族呼称に見るが如き、親族を「父方の」(paternel) と「母方の」(maternel) によって区別される習俗があったかどうかについて知らなくてはならない。

まず中国では「父方の親族」を「本家」といふ「母方の親族」を「親戚」と呼ぶことは更めて申す迄もないが、モンゴルでは、われわれの国語と同様、いちように「親類」と呼んだらうか、それとも区別をしただらうか。

最も古い「秘史」では、親族を表わす漢語に二つの語彙を挙げている。その一つは「親戚」uryu (I-7b)、その二は「親家」quda である。前者には現代モンゴル語では「家族、部族」のほか「母方の親類」を意味し (Kowalewskii, Dictionnaire, p. 460a) 中国語の「親戚」と一致するが、中世でも同様であったらうか。quda は全く婚姻関係を結んだ他氏族を総称した語である。なお「至元訳語」には「親族」を表わす語を載せていないが、「華夷訳語」人物と「廬童塞略」品職 には「親眷」(異姓の親族) に均しく「兀里撒敦」(uri-sadun) とし、ほかに「親家」に「古答」quda としておる。が「親眷」と「親家」との厳密な相異は明らかでない。

婚姻による親族をさらに細かく見て、叔伯父母に対しても区別されたであろうか。この点に関しては称谓の発達した漢人は正確に区別して伝えているようで、伯（「父方の兄」、叔（「父方の弟」）によって、父の兄弟の排行を示し、前者は *ebin* といわれるが、ただ一回見ゆるのみで、後者は *abaya* とし、これを修飾語として、*-egeci* を附すれば「父の姉」、*-bergen* を附すれば「父の弟の妻」等を意味する。また *aqai egeci* 「姑姑」（父の姉妹）の語もある。

「母方の」親類は *törgüm* (pl. *törgüd*, 「秘史」一ノ四二オ) の語で総称されるが、いちいちの称呼は、漢語「舅」モンゴル語 *naγacu* を修飾語として、たとえば、*-aga* は「母の長兄」、*-ecige* は「母方の祖父」、同様に *-eke* は「母方の祖母」、*-egeci* は「母の姉」、漢語の「姨」等を表わす。

こゝで注意すべきは「従兄弟、又は従姉妹」（父方、母方の別は姑くおき）を表わす言葉が「秘史」以下漢蒙対訳語彙集に見られぬことである。然しこれを欠くのはなく *üyeled aga—degü* は「従兄弟」*bölö* (od. *böle degü* は「母方の従弟」と訳されるが、後者はカルマック語では、たんに *bölö* や「従兄弟」、二人の姉妹の子供」の意味をもっている (Ramstedt, Wörterbuch, S. 55b)

かくてモンゴル人も親族に対しては、ほぼ「父方」と「母方」の区別をもっていたことが明らかとなったことであろう。要する

に同じ胞から出た一族が *törü* と呼ばれたに反し、婚姻による親族一般はだいたい *uruy* と呼ばれたのである。

然らばその他の称谓としてモンゴル特有の意義を併有するものに、いかなるものがあつたらうか。次にこれについて考察しよう。

(1) *ecige* (父)。「父」を意味するこの語は、古くは三つの意味に使用された。

- (a) 実父に対し
- (b) 実父の義兄弟 (*anda*) に対し
- (c) 長老に対する敬称として

とくに(c)のばあいはチュルク語の *ata* (父) と同様であった。

チングスの母 *Hoelin* が夫イエスゲイの歿後ムンリックなる者に再嫁したという俗説はこの「エチゲ」の語の曖昧さから生れたものである次第については、わたくしのかつて詳しく論証したところであるから、改めてこれには触れない。たゞカルマック語ではこの語の外に *baw* というのがあり、これは孫が父をかく呼ぶ、祖父に対しては生前または同居中は「エツェゲ」と呼ぶといわれ、やうに「Onkel」をも意味していることを附記する。(J. Ramstedt, opt. cit., S. 38a)

(2) *eke* (母)「母」という語も「実母」のほか、氏族内の主婦の長老に対しても用いられたことは、ゴアクチンという召使の老婆がタイチウト部が急襲して来たとき、チングスの母ホエルンに対し「エケ・エケ」と呼んでいることから推定される。(5)

ルマック語では *aka* に「母、叔母、兄の妻」などの意があるが、(Ramstedt, opt. cit., S. 20b) また「祖母が孫たちと生活するばあい、後者は彼ら自らの母(アーカ)と呼び、祖母はその子および孫たちによりエーチと呼ばれる」。(同上書)。こゝで注意されることは「母」が同時に「おば」と呼ばれることである。

(e) *aga* (兄) と *degü* (弟)。実際の排行上の「兄」を意味するほか、妻が夫を、または女子が男の愛人を呼ぶのにも用いられ、わが国語の「せ」というに同じ。(カルマック語では同時に「おち」をも意味する。Ramstedt, opt. cit., S. 3b) 弟 (*de'ü*, *Schrift-mong. degü*) のばあいも必ずしも血縁たるを要しない。チンギスは自分の有力な家臣の一人を「弟」と呼んでいる。

このほかに「秘史」を玩索すると、卷二にのみついてみて、タイチウト (*Taiči'ud*) 部のことを「兄弟」と呼んでいることが注意をひく。第七四節には夫イエスゲイの歿するや、タイチウト部が寡婦・幼子を棄てて他に移動したことを叙べる条に「奏赤兀惕の兄弟に、額額兀真を、寡婦を、子ども、幼児ども、母子等を、営盤の裏に棄てて起たれて云々」(「実録」五〇頁) といふ、あるいはテムジン兄弟が異兄のベクテルとベルグテイと仲違いをしたのに対し、母がモンゴルの古い諺「影より外に伴なく、尾より外に鞭なし。」というを引いて諫める条りに「奏赤兀惕の兄弟の苦めをいかで報いん、我等」といつてること(第七六節「実録」五三頁) さらには右の異母兄のベクテルをテムジン、カサル兄

弟が前後から射殺しようとしたとき、ベクテルが「奏赤兀惕の兄弟の苦めを受けかね云々」(「実録」五四頁) といひ、また第八二節にも第八三節にもこの語が見えるが、後者では水中に隠れ臥すテムジンに対するソルカン・シラの語の「汝の兄弟(族)は、口の牙を磨ぎ来ぬ。しか臥し慎めよ」(「実録六一頁) などに見ゆる用例はどう解釈するべきだろうか。

タイチウト部の祖先アムバガイ (*Ambayai*) はチンギスの所属するボルジギンの遠祖 *Alan-ya* の第二子ボドルチャル(神靈であ) から出ており、同じく「黄金氏族」(*altan uruy*) の系譜に入るのである。モンゴル諸部の起源については、ラシード・ウッ・ディーニに詳しいし、わたくしも論及したところがあるから、ここでは触れないが、古いモンゴル人間では、祖先を共通とする氏族成員間では互いに *aga*, *de'ü* (兄、弟) と呼び合うたものと解釈されるのである。

(4) 子供を意味する二つの語が「秘史」に見える。一つは *kö'ün* (*Schrift-mong. köbegün*) であり、もう一つは *caga* といふ。前者は肉親関係を示す語であるが、義兄弟 (*anda*) の子に対しても用いられているが、これは親愛を示すに外ならぬこと申す迄もないが、またタイチウト部のウナガン・ボオル(これについてはミルツォフの蒙古社会制度史一四七頁以下に詳しく、「奴隸」と訳さるべきでなく、全氏族に属した自由人であり、領主同様の氏族生活を営んだ、) たるソルカン・シラがタイチウト氏族の成

員に向つて「タイチウトの御子だち、汝等。……」（秘史第八三節、実録六一頁）と呼んでいる。

また家族成員の称呼のうち、モンゴル特有のものとして、末子の意味す称呼がある。古くからモンゴル民族が末子相続であつたことは、あらゆる報告に見えてゐるが、これを *odcigin* と呼んだ。ラシード・ウツ・ディーン（ベルデン教授ロシア語訳第二卷六〇頁）には

ウトヂギン (*utzigin*) は竈と帳幕の主人である。末子はウトヂギン（エヂェン）と呼ばれる。

とあり、また同書第一卷二〇七頁に

モンゴルの習慣では、末子はエヂェン（*ejen* モンゴル語「主人」の意）と呼ばれる。彼は家にあり、財産、経済及び家政が彼のものと定められてゐるからである。

とある。事実、われわれは末子名にしばしば *odcigin* なる語が伴うのを知つてゐる。

しかし長子が疎外されたというのではない。モンゴル社会史上の別乞 (*beki*) の制——これはシャマニズムの呪術師（酋長）を意味し、とくにメルキト [*Merkid*] 部やオイラート [*Oirad*] 部のとき「森林の民」 (*hoi-yin irgen*) の首領の戴したものの——で、主として長子がこの称号を帯びたのであるし（ウラディーミルツォフ著前掲書一一〇頁——一二頁参照）、また「秘史」のうちには長子を讃えた言葉が見えるし、チンギスのヤッサ (*Yasa*, 札

撒。律令のこと) 中にも長男に財産上の優越権を賦与する言葉は、マラキヤ所伝のうちに見え、「財産の分配は次の原則による。年長の者は年少の者よりも多くを得、末弟は父の家督を相続す、云々」(ウェ・ア・リヤザノフスキ著蒙古慣習法の研究、東亜経済調査局邦訳本一三頁) とあるにより知られる。

わたくしはさきに、婚姻による親族は相互に *quda* と呼ばれたと云つたが、いまやこれについてさらに補説しよう。

十三・四世紀モンゴルにおける *quda* というのはたんなる婚姻による親類よりもつと意味があつた。それは「長期婚約による関係」を示す言葉で、いつに「世婚」とも呼ばれ、⁽⁹⁾ かかる関係にある氏族員相互は、現実に婚姻が行われていない⁽⁹⁾ ばあいても *quda* と呼び合うことができたのである。このことは「秘史」(一、四

ウ・第六一節から六二節に、チンギス九才のとき、父のイエスゲイが妻の里方のオルクヌウト (*Olqnu'ud*) 氏族の民のところ⁽⁹⁾ にわが子のため妻を求めにゆく途次、オンギラト (*Ongirad*) 氏族のデエイ・セチェン (*Dei-Secen*) に出会つたが、その時、後者はイエスゲイに向つ「*quda* よー誰のもとに指して来つるか？」といひ己れの吉夢を告げたのち、美しい韻文で、昔からオンギラト氏族は美しい女子を「汝らの大君となれる者」に与える風習のあることを語つてゐることにより確証されよう。

わたくしは小篇でモンゴルのあらゆる婚姻形式や儀礼について叙べる考はないが、従来、社会史上等閑に附され来つた一・二の

点については訂しておかなければならない。その一つは「秘史」の当該個処に関する中国史料との出入であり、も一つはいわゆる「後母を娶る」ことが、厳密な意味の Levirate 婚というるかどうかということの二点である。

まず明初の人葉子奇著草木子^二卷^一雜制篇に、

元朝の正后は皆、雍吉刺 [Onggirad] 氏を用う。太祖よりその族帳と誓を設て、同に天下を取らば、世々その女を用つて后と為さんと。なお契丹 [Kitan] に国用あり、世々蕭氏を用つて后となすがごときなり。

とし、オンギラトとチンギスの所属したボルジギン氏族とが「世婚」の関係に入つたのは太祖チンギスの時よりのこととしており、同書の同じ巻にも、

……太祖、雍吉刺氏とともに天下を取り、約して曰く、わが男長じて帝と為り、汝が女は長じて后と為さんと。

と見え、あるいは元史^一卷^一一八后妃伝、太祖光猷翼聖皇后の条に、

光猷翼聖皇后、名は旭貞 (Üjin, 正しくは Hoelün, üjin)。

弘吉刺 (Onggirad) 氏。特薛禪 [Dei-Sečen] の女なり。特薛禪は子の按陳 [Mcin] と太祖の征伐に従ひ功有り、号を国舅と賜う。王爵を封じ、以てその部族を統ぶ。旨有り。女を生まば后と為し、男を生まば公主に尚し、世々絶えざらん、と。

とあり、同様の記事はまた元史^一卷^一一八特薛禪伝に、

丁酉 [1237]、錢二十万緡を賜う。旨有り、弘吉刺氏女を生まば、世々后となし、男を生まば世々公主に尚せん。毎歳四時孟月、賜う所の旨を読むを聴く。世々絶えず。

とある。われわれは「秘史」が真を伝えるものとして従うべきであらう。

かゝる婚姻——世婚——は古代匈奴の間にも見られた。匈奴の貴種としての呼衍・蘭氏・須卜の三氏があったが、史記正義の著者唐の張守節は後漢書に据つて、うち蘭氏と須卜の二氏は「常に单于と婚姻す」といつている。

つぎにレヴィレイト婚についてみる。レヴィレイト婚はいっぱんには「嫂婚制」と訳されているが、ローウキ教授の定義では「レヴィレイト」(ラテン語 Levir「夫の兄弟」)婚とは亡兄の寡婦を継承することであり、ソロレート (Sororate) 婚とは亡妻の姉妹と結婚することであり、これらは主として氏族 (clan) の存在しないところに起るとしているが、しかしレヴィレイト婚もソロレート婚もオーストラリアの如き氏族組織の繁榮している処では普通である。北アメリカでは婚姻のこの二形式は、屢々氏族の存在を問わず存在し、同様のことはアフリカでも見れる⁽¹⁰⁾といふ、マードック教授に従えばレヴィレイト婚とは、「寡婦が選択により、その亡夫の(兄)弟と結婚することを規定する文化規範である。かくて屢々男子の第二次の婚姻となるのである。継続的ではなくて、一時的な結婚に適用されたばあい、レヴィレイト規範は上

述の如く、兄弟の一夫多妻制の結果になるのである⁽¹¹⁾。文化人類学者の定義を俟つまでもなく、レヴィ・ストロースは、「嫂」を娶るのである。したがって自己の実母以外の父の「後母」を娶るという匈奴以来、北方アジアの遊牧民族の婚姻形式は、別の言葉によって峻別されるべきではないかというのは、研究者の誰もが考える点であろう。

わたくしは親族称呼を表わす語彙を、古くは「秘史」^(これは)でもなく、蒙漢語彙集ではなく、史書であるから、悉くの親族称呼を含まず、わずかに偶然的に記載されたものに限定されるが「至元訳語」および「華夷訳語」等に見ゆるもの、それに若干の乏しい自身のモンゴル語の知識によって略述したものであるが、更に精査するの結果は、附加すべき事実もあろうかと考える。マードックがその著「社会構造論」中に、全世界の諸部族中二五〇について「通文化的研究」(Cross-cultural survey)を行ふ、一定の居住(residence)と一定の出自(descent)は、さかなる親族名称の型と結びつく傾向のあるかを明かにしたように、モンゴルの社会構造の型がいかなるものであるかを明白にすることも、或は可能かも知れない。しかし遺憾ながら現在のわたくしには、時間の余裕と十分な知識とを有しない。素材のまゝ提供して後考を俟たざるを得ない。

註

- 1 大林太郎学士「親族組織研究の最近の諸動向」(一九五四年十月二十二日東洋文化研究所発表)参照。同学士が、右報告のレジューメ及び本文引用のローウキ、マードック、レヴィ・ストロース諸教授の著書を貸与されたことを感謝する。
- 2 ベ・ヤ・ウラデーミルツォフ教授著蒙古社会制度史、邦訳一三五頁。törgüd. pl. of törgüm.
- 3 「房親」は「秘史」一ノ十一オの明初の直訳であり、那珂博士は「房親の人(夫の兄弟)」と注し(実録一〇頁)、ヘーシユ教授は「Hausgenossen-Brüder」(ドイツ語訳本三頁)、ペリオ博士は「cousins germains [de notre père]」(フランス語訳本一二三頁)とし「父の従兄弟」と訳している。何に基いたか詳でなすが、モンゴル原語 üye-qaya は未詳の語である。「至元訳語」人事門に「叔伯兄弟」に対し「王也」の訳音を宛てているが、もしこの「王」字が「五」字の誤ならば「五也」üye となり、この語の解明に一つの光を投ずるものであろう。

- 4 この事実についての詳細な考証は拙稿「成吉思汗生母再婚説の否定」(善隣協会調査月報第四八号、昭和十一年五月所載)に見えている。該論文でわたくしは一七二六年ライデン刊不詳氏フランス語アブル・ガーデ「蒙古韃靼史」一三三頁一七八〇年G・メッサ・シュミットの同書ドイツ語訳本五六頁、七三頁、最後に一八七四年刊デ・メーゾンのフランス語訳本五五頁、七五頁を引いて、ata「父」がトルコ人間の、有徳長老に対する敬称で、ムンリクは夙くからこの称を帯びていたことを明らかにした。
- 5 元朝秘史二ノ四二ウ、第九八節参照。同上、一ノ三七オ、第五六節参照。

7 詳しく系譜を表示すべきであるが、小論の目的は他にあるので略する。拙稿「ラシード・エッ・ディーンに見えたる民俗学的資料について」(民族学研究、第十二卷第三号所載)参照されし。

8 同上論文参照。

9 元、閻復撰駙馬高唐忠獻王碑「元、蘇天爵編元文類卷二十、三所收」に「……仍て世婚を約し、交友の好みを敦うす。按答 [anda] 忽答 [quda] と号す」とある。

1110 R. Lowie, Social Organization, p. 38.
G. Murdock, Social Structure, p. 29.

むすび

以上わたくしは(一)において家姓を有せぬ遊牧民族たるモンゴル人の父系的氏族を表わす obog が、漢人の手により「姓」と訳されているが、「姓」字の本義が「同一血縁集団」(Sippe)を示すものであるから、訳語としては正しいが、同一の「骨」(Yasun)に属するもの——血を同する父系の親族から出たことを意味する——と意識されたこと、しかしモンゴル人はさらに「白い骨」と「黒い骨」との二種に分つたが、レヴィ・ストロース教授の分析した「骨と肉」の信仰——「骨」は父方から、肉は母方から受くるといふ——の痕迹的存在を示すものであるかどうかについて考察し、(二)においては、社会人類学上に重要な意義をもつ親族組織研究上の前提として、親族名称を十三世紀の古典「元朝秘史」以下元・明の蒙漢語彙集から蒐録し、そのモンゴル独特の意義を調べることはもちろん、親縁意識は宗法の嚴重な中国社会と比較

してどの程度に強かったかを考えた。しかしその結果を最近の社会人類学の成果に照してマードックが行つたような、それがいかなる親族名称の型と結びつくかは明白にしえないが、ふつう常識的には、水草を遂うて遊牧し、老を賤しむ民族にも拘らず、意外にも、尠くとも日本と比較して、その語彙が豊富であり、父方・母方の区別、祖先・子孫の上限七代・下限五代(詳細は不明としても)のあること、しかし他面の曖昧性(父とおぢ、母とおば)を知り、最後に父の死するや「後母を娶る」婚姻形式を、亡兄の嫂を娶る、いわゆるレヴィラート婚と同一術語で呼ぶことの不穩当などを考証したのである。しかし飽くまでも素材であつて、体系的な社会学的説明は、わたくし自身の後考、または専家の考察に俟たなければならぬものである。(一九五五・一・一〇)

附記

本論では中国人が「骨は父方から受け、肉は母方から受ける」といふ觀念を有することを示す史料を挙げえなかつたが、頃日たまたま高田与清の松屋筆記を繙いたところ、同書卷八十六(十四)、黒坊黒鬼子白鬼子崑崙奴紅毛の条に、清の趙翼の簞曝雜記卷四の記事を引いた個処に、右の觀念の存在を語る部分があるのを見出したので、次に之を転録しておく。

「上略某家、一黒奴を買い、配するに奥婢を以てす。子を生む。或ひと之に戯れて曰く、爾は黒鬼、兒を生む、まさに黒かるべし。今、兒白きは爾の生むに非ざるなりと。黒奴果して疑い、刀を以て兒の脛を斫る。死して脛骨「及び」純黒なり。是に於いて大いに働き、始めて骨は父に属して肌肉は則ち母体なるを知れるなり。」